

神は愛なり光なり  
《 神秘と救いの世界 — 霊界物語 》  
霊界物語 霊主体従  
子の巻（第一巻）

第 2 1 章 ～ 第 2 3 章

第二章 《大地の修理固成》 [二一]

現代語訳

一、

122 大国常立命はそこで、きわめて荘厳な、厳格で犯すことのできない、すばらしく偉大なお姿を顕わしなされて、地の世界最高の山の頂きにお登りになられ四方を見渡されると、すでに天には日月星辰が完全に現われ、地上には山や川、草や木が発生したとはいえ、樹木や草はほとんど葱のように繊弱く、葦のように柔かなものであった。そこで国祖は、その御口より息を吹いて風をおこされた。その息によって十二の神々が御出現になられた。

ここに十二の神々は、各自に分担を定めて、風を起しなされたが、その風の力によって松、竹、梅をはじめ、総ての樹木や草はベタベタに、その根本より吹倒されてしまった。大国常立尊はこの有様を御覧になって、御自身の胸の骨を一本抜きとり、自らの歯でコナゴナに咬みくだき、四方に撒布なされた。

すべての軟かな動植物は、その骨の粉末を吸収して、その質は非常に硬くなり倒れていた 123 樹木や草は直立し、海鼠のように柔らかく、腹ばっていた人間その他の諸々の動物も、この時はじめて骨が骨が真わり、素早く動作することが出来るやうになった。五穀が実るようになり、葱のように一様に柔らかく、ほとんど区別のつかなかった総ての植物は、はっきりと、おのおの特有の形体をとるようになったのも此の時からである。骨の粉末の固まり着いた所には岩石ができ、諸々の鉱物が発生した。これを称して岩の神と申しあげる。

二、

それなのに太陽は依然として強烈な光熱を放射し、月は大地の水を吸い続けているので、地上の樹草は次第に日に照りつけられて殆ど枯死しようとし、動物も赤この日照りつづきの空に非常に困っていた。しかし月からは、まだ水を吸引することを止めなかった。このまま放っておいたなら、全世界は干鱈を焦がしたやうに燻ってしまうかも知れないと、大国常立命は山上に昇って、まだ人体化しておらない諸々の竜神に命じて、海水を口にふくんで持ってこさせられた。

諸々の竜神は命を受けて、海水を国祖の許に持ってきた。国祖はその水を手に受けて、124 すぐさまそれを口に呑み、天に向って息をフーと吹き放たれた。すると天井には色の濃い雲や薄い雲や、その他種々雑多の雲が発生してきた。たちまち雲からサツと地上に雨が降りはじめた。この使神であつた竜神は無数にあつたが、国祖はこれを総称して雨の神と名付けられた。

ところが雨が降りすぎてもかえって困るというので、これを調整するために、大国常立尊は御身体一杯に暑いほど太陽の熱をお吸いになった。さうして御自分の御身体各部より熱を放射された。その放射された熱はたちまち無数の竜体と変り、天に向って昇っていった。国祖はこれに火竜神といふ名称をお付けになった。〈筆に書いては短いが大國常立尊がここまで天地をお造りになるのに、数十億年の歳月を要している〉

三、

尊はこの様にして人類を始め、動物、植物等をお創造になられて、人間には日の大神と、月の大神の靈魂を分け与えられ、肉体は国常立尊のお取り扱いとして、神の御意思を実行する機関となさいました。これが人生の目的である。神示に『神は万物普遍の靈にして 125 人は天地経綸の大主宰なり（神の靈魂は天地間の、総ての物にあまねく行きわたっており。人の使命は地上は元より天上までも、また、現実世界は元より靈界までも、宇宙全体を整え治めるために構想し、実践すべき主体者である。）』とあるのも、この理由によるのである。

それなのに年月が経過するにしたがって、人智は乱れ、思いやりの心は拗げ、意《気持、考え》は曲り、人間は次第に自分勝手な欲をもって行動し、ここに①弱肉強食（弱者の犠牲の上に強者が栄え）、生存競争《身勝手に生きていくための闘争》の始まりとなり、せつかく神様が御苦心の結果、創造になられた善美《すぐれてしかも美しい》なこの地上も亦、もとの泥海に戻さなければならぬような傾向がでてきた。

四、

さて大地の一方では、天地の間に残滓のやうに残っていた邪気は、凝り固まって悪竜、悪蛇、悪狐を発生し、或ひは邪気となり、妖魅となって、わがままでしまりのない人間の身魂に乗り移り、世の中を悪化して、邪霊の世界にしようとして企てた。そこで大国常立大神は非常にお怒りになって、深いためいきをおつきになった。その太いゆるやかな息から八種の雷神や、荒の神がお生れになったのである。

それで荒の神のお働きがあるのは、大神が地上の人類に警戒を与えられる時である。こうしてしばしば大神は荒れの神の働きによって、地上の人類に警告をなされたが、人類の大多数は依然としてその愚かさから目覚めない。そこで大神は大変にもどかしがりになられ威厳のある大声を上げられ、126 大地に四股を踏んでお怒りに成られた。そのとき大神の口、鼻、また眼より多くの竜神がお生まれになった。この竜神を地震の神と申し上げる。国祖の大神の極端にお怒りになった時に地震の神が働き出すのである。大神の怒りは私的な怒りではなく、世の中を善美に立替え立直したいための、大きないつくしみあふれる心のお現われに外ならぬのである。

五、

大国常立尊が天地を修理固成なさってより、ほとんど十万年の期間は、別に今日のやうに区切られた国家はなかった。ただ地方地方に範囲を定めて、八王といふ国魂の神が配置され、八頭といふ首相の神が八王神の下にそれぞれ配置されていた。

それなのに世の中はだんだん悪くなり、大神の御心に合わないことばかりが始まり、怨恨（うらみ）、嫉妬（ねたみ）、悲哀（かなしみ）、呪咀（のろい）の声は、天地一杯に充満してしまった。そこで大国常立大神は再び地上の修理固成を計画なさって、ある高い山の頂上にお立ちになって大声を発せられた。その声は多くの雷が一度に鳴り響くようであった。大神はなおも足を踏み鳴らして地団駄をお踏になった。そのため大地は揺れにゆれて、地震の神、127 荒れの神が一緒になって動きだし、地球は大きく元の姿を変えてしまい、山河はくづれて埋まり、草木は倒れ、地上の人々はほとんど亡びるまでになった。その時の雄健（叫び声）びによつて、大地の一部が陥落して、現在のアフリカの一部と、南北アメリカの大陸が出現した。それと同時に太平洋もでき上り、その真中に竜形の島が出来上がった。これが現代の日本の姿である。それまでは今の日本海はなく中国も朝鮮半島も、日本と陸地で連続していた。この時まで現代の日本の南方、太平洋方面にはまだ数百キロメートルの大陸がつづいていたが、この地球の大変動によって、この中心の最も地盤の強固な部分が竜の形ちとなって取り残されたのである。

この日本の国土が竜の形をしているのは、元の大国常立尊が、竜体となって地上の泥海を造り固めていられた時のお姿と同じであって、その長さも、幅も、寸法において少しも変りはない。それで日本国は、地球の良（東北）に位置して清浄でけがれのない、犯す事が出来ない土地なのである。もと黄金の円柱が、宇宙の真中に立っていた位置も日本国であったが、それが、東北から、西南に向けて倒れた。この島を自転倒嶋（おのころじま）というのは、自ら 128 転げてできた島といふ意味である。

この島が四方に海を環らしたのは、神聖な神の御休みになる所とするためなのである。さうしてこの日本の土地全体は、すべて大神の御肉体である。ここにおいて自転倒嶋と、他の国土とを区別し、はっきりと分けておかれた。

六、

それから大神は天の太陽、太陰（月）に向わせられ、陽気と陰気とをお吸いこみになって、息を吹き霧をお出しになった。この霧より御出現になられた神が稚姫君命である。

その時の地変によって、地上の人類はほとんど全滅して、その様子はちょうどノアの洪水の当時を思い出させる状況であった。そこで大神は、諸々の神々および人間をお生みになる必要が生まれたので、まづ、稚姫君命は、天稚彦（あめのわかひこ）という夫神をおもちになり、真道知彦（まみちしるひこ）、青森知木彦（あおもりしるき）、天地要彦（あめつちかなめ）、常世姫（とこよ）、黄金竜姫（こがねつね）、合陀琉姫（あうたると）、要耶麻姫（かなやま）、言解姫（こととき）の三男五女の神人をお生みになった。この天稚彦というのは、古事記にある天若彦とは全然別の神である。このように地上に地殻変動を起さなければならなかったのは、要するに天において天上の政治が乱れ、それと同じ形で、地上に混乱状態が現れて 129 来たからである。天にある事はかならず地に映り、天が乱れると

地も乱れ、地が乱れると、天も同様に乱れてくるものである。そこで大神は天上を修理固成すべく稚姫君命をお生  
みになって天にお昇せになり、大地の世界は幽界を御自分で治められ、現界の支配を須佐之男命に御  
委任になった。

一、

大国常立命はきわめて荘厳な、厳格で犯すことのできない偉大なお姿で地の世界最高の山の頂きに立たれた。こ  
の世界最高の山は天教山（芙蓉山、富士山）で一名須弥仙山ともいう。日月星辰や山川草木が発生したが、動植  
物には骨格となる骨がなく、ねぎのようにか弱であったとあります。

国祖が息を吹かれて十二柱の風の神が生まれがその息で動植物はみな倒れたので、胸の骨を抜き取りお口で粉々  
に噛み砕き四方に散布された。その骨の粉末を吸収して、人間始め全ての動植物はおのおの特有の形体をとるよ  
うになった。そして、骨の粉末の固まり着いた所には岩石ができ、諸々の鉱物が発生します（岩の神）。

大初、動植物はおろか大地すらも軟弱であったと書かれていて、それ等に骨を与えられそれぞれに特有の形体  
を持つようになったと書かれています。

二、

この時点では太陽は強烈な光熱を放射し、月は大地の水を吸い続けているので動植物は日照りに枯死せんとし  
ていた。そこでまだ人体化していない竜神に命じて海水を口にふくんで持ってこさせ、それを口に含んで「天に向  
って息をフーと吹き放たれた。すると天井には色の濃い雲や薄い雲や、その他種々雑多の雲が発生してきた」と  
あります。天に天井があるわけがないのでこの場合の天井という意味は、雲で塞がれたからであろうか。それと  
も青天井という場合の天井なのか。ここに初めて雲が出来雨が降って気候の調整が出来るようになったようです  
（雨の神）。雨を調整する神が火竜神か。

ここは神話風に書かれているので短い歳月のように思うが、実際は数十億年を要したと書かれています。

三、

人が何故生まれて来たか、またその目的は何か示されています。「人間には日の大神と、月の大神の靈魂を分  
け与えられ、肉体は国常立尊のお取り扱いとして、神の御意思を実行する機関となさいました。これが人生の目  
的である。」とあります。人（<sup>ひと</sup>霊止）の一霊には四魂（基本宣伝歌・一霊四魂を参照）が具わっています。荒魂、  
和魂は霊系に属し日の大神より分け与えられたものです。幸魂、奇魂は体系に属し月の大神より分け与えられた  
ものです。そして、肉体は国常立命より与えられた（土より蒸しわかされたと示されている）のです。したがっ  
て、現界において神の御意思を実行する機関なのです。

神示に『神は万物普遍の靈にして 125 人は天地経綸の大主宰なり』とあり、その意味は 神の靈魂は天地間の、  
総ての物にあまねく行きわたっており。人の使命は地上は元より天上までも、また、現実世界は元より霊界ま  
でも、宇宙全体を整え治めるために構想し、実践すべき主体者である。となります。これが意志の実行機関とい  
う理由になるのです。

天地が陰陽、霊体二元によって出来ている以上この二元が全き物とならなくてはなりません。宇宙をミロクの世  
（完成した世）にするためには現界においては肉体を持つ人が神の意志の代行者であり、神業の実行者です。

しかし、年月が経過するにしたがって本来の目的を忘、人心は乱れ弱者の犠牲の上に強者が栄え（弱肉強食）、  
身勝手に生きていくための闘争（生存競争）の始まりとなり、神様が御苦心の結果、創造になられたこの美しい  
地上も亦、もとの泥海に戻さなければならぬような傾向になってきたのです。

四、

陰陽、善悪二元の世界である以上天地間には残滓（<sup>かす</sup>邪気）が残り、そこから悪竜、悪蛇、悪狐が発生し、また邪  
気や妖魅が生まれたとあります。それらは人間の身魂に乗り移り、世の中を悪化して邪霊の世界にしようと企て

たのです。そこで大国常立大神は非常にお怒りになって、深いためいきをおつきになったので八種の雷神や、<sup>荒</sup>の神がお生れになり地震が発生するのです。

荒の神のお働きがあるのは、大神が地上の人類に警戒を与えられる時です。しかし、人類は依然としてその愚かさから目覚めないで、大神は大変にもどかしがり大声を上げ、大地に四股を踏んでお怒りに成られた。そのとき大神の口、鼻、また眼より多くの竜神がお生まれになった。この竜神を地震の神と申し上げます。

地震が発生するのは国祖が極端にお怒りになった時です。それは大神の何とか世を清め善美に立替え立直し（精神的にも物質的にも作り替える）たいという、大慈の思いの表れなのです。

こんどの東日本の大震災（3. 1 1）などは神様がお怒りになった証で一つの大きな警告です。人の心は極端に悪くなっています。政治家も経済人も全てが自己の利益しか頭にありません。本来の日本人の心はどこへ行っただけでしょうか。日本は神の国です、世界に範を示す使命を持った民族なのに己の利益だけを追求しています。このまま行けばさらなる戒めがあるでしょう。上に立つ人、社会をリードする立場にある人は特に心したい物です。特に大本人は意識を持って欲しいものです。これからは祓戸の神の大きなお働きが始まります。

五、

大国常立尊が天地を五六億年の歳月をついやしてお造りになられたが、未だ完成の状態ではありませんでした。そこでさらに修理固成なさいました。その後、ほとんど十万年の期間は国家は形成されず、主要な地点を八王、八頭が治めていました。しかし世の中が追々と悪化し、<sup>怨恨</sup>（うらみ）、<sup>嫉妬</sup>（ねたみ）、<sup>悲哀</sup>（かなしみ）、<sup>呪咀</sup>（のろい）の声は、天地一杯に充満します。そこで大国常立大神は再び地上の修理固成を計画なさって天教山の頂で大声を発し、地団駄をお踏になったので地震の神、荒れの神が一緒になって動きだし、地球は地殻変動を起こします。それによって現在のアフリカの一部や南北アメリカの大陸が出現しました。それと同時に太平洋もでき上り、その真中に竜形の島が出来上がったのです。これが現在の日本の姿です。

「この日本の国土が竜の形をしているのは、元の大国常立尊が、竜体となって地上の泥海を造り固めていられた時のお姿と同じであって、その長さも、幅も、寸法において少しも変りはない。それだから日本国は、地球の良（東北）に位置して清浄でけがれのない、犯す事が出来ない土地なのである。この島を<sup>おのころじま</sup>自転倒嶋というのは、自ら転げてできた島といふ意味である。」と日本が竜形で世界の東北に位置することが書かれています。

物語では大陸のことを浮き<sup>しま</sup>洲と表現されています。アフリカ大陸は筑紫の<sup>しま</sup>洲、南米大陸は高砂島と書かれています。洲は「しま」とも読み大陸を現し五大洲やアジア洲ともいいます。

現代ではプレート運動と云って大陸が移動することをいいます。それは中生代末に地球に大きな地殻変動が起こります。この大国常立のお怒りはドイツのアルフレート・ヴェーゲナーが提唱した大陸移動説〔1912年（明治45年）発表〕を指しているのでしょうか（一億年程前）。一つであったゴンドワナ大陸がアフリカ、南アメリカ、インド、オーストラリア、南極に分かれ（海の上を漂う島のように）インドがユーラシア大陸にぶつかりヒマラヤ山脈が出来ます。

「日本の土地全体は、すべて大神の御肉体である。ここにおいて自転倒嶋と、他の国土とを区別し、はっきりと分けておかれた。」とあります。奄美諸島が日本のひな形であり。また日本が世界五大州のひな形です（②三段の型）。神代、竜体で活動された大国常立命の姿そのものが日本国で、あらゆる面で日本は他の国、島々とは抜きん出ている神国です。日本の国土が元の大神様の肉体であるとすれば頭はどちらでしょうか、良の金神国常立尊であれば北海道が頭で、坤の金神豊雲野尊であれば台湾が頭になります。

#### ■大国常立尊がお生みになった神々（竜神）

- 1, 十二の神々： 風の神（国祖は、その御口より息を吹いて風をおこされた）
- 2, 岩の神： 物の形体を特徴付ける骨（すべての軟かな動植物は、その骨の粉末を吸収して、その質は非常に硬くなる。骨の粉末の固まり着いた所には岩石ができ、諸々の鉱物が発生した）
- 3, 雨の神： 水を手に受けて、すぐさまそれを口に呑み、天に向って息をフーと吹き放たれた。すると天

井には色の濃い雲や淡い雲や、その他種々雑多の雲が発生してきた。たちまち雲からサツと地上に雨が降りはじめた

- 4, 火竜神： 気象の調整（雨が降りすぎてもかえって困るというので、これを調整するために、大国常立尊は御身体一杯に暑いほど太陽の熱をお吸いになった。さうして御自分の御身体の各部より熱を放射された。その放射された熱はたちまち無数の竜体と変り、天に向って昇っていった）
- 5, 八種の雷神、荒れの神： 荒の神のお働きがあるのは、大神が地上の人類に警戒を与へられる時である
- 6, 地震の神： 国祖の大神の極端にお怒りになった時に地震の神が働き出すのである

六、

稚(若)姫君命の誕生が述べられています。

「その時の地変によって、地上の人類はほとんど全滅して、その様子はちょうどノアの洪水の当時を思い出させる状況であった。そこで大神は、諸々の神々および人間をお生みになる必要が生まれたので、まづ、稚姫君命は、天稚彦あめのわかひこという夫神をおもちになり、真道知彦まのみちしるひこ、青森知木彦あおもりしるき、天地要彦あめつちかなめ、常世姫とこよ、黄金竜姫こがねたつ、合陀琉姫あうだる、要耶麻姫かなやま、言解姫ことときの三男五女の神人をお生みになった」

現代の考古学では類人猿と我々の祖先である人とは全く種類が違うようで、この時新しく生まれた人間が我々の先祖である現生人類なのでしょう。

最近では、現生人類がアウストラロピテクスや、ホモ・エレクトゥスから出てきたのではなく、「当初から」存在していたという考え方が有力です。人類の歴史に「猿人」→「原人」→「旧人」→「新人」というような進化的発展はなかったようです。

「最初の新人類は、従来考えられたよりはるかにスマートであったばかりか、それもずっと早くから存在したようで、進化論者が、「猿人」とか「原人」と呼んだものは、人類の祖先などではなかったようです。

また、ネアンデルタール人は現生人類とよく似ており途中で絶滅したとされています。もしかしたらこの地殻変動以前の人類かも知れません。現在ではネアンデルタール人と現生人類は起源が同じと考えられています。いずれにしても、ミロクの世が来れば解決されることです。

なお、「三男五女の神人をお生みになった」と云う意味は分かりません。

顕幽一致で、「天が乱れると地がみだれ、地が乱れると天がみだれる」とあります。天の乱れも収まったようで、いよいよ地の乱れも治まる時がモウ間近です。

参考

■大本三大学則（神の黙示） 第13巻 総説 より

(二) 靈力体

神徳の廣大無辺なる、人心小智《うわべだけの浅いちえ》の能く窺知《うかがい知ること》すべき所にあらず。然りと雖も、吾人静に天地万有の燦然《きらきらと光るさま》として、次序《順序》あるを觀察し、また活物の状態に付て仔細に視察するに於て明かに宇宙の靈力体の運用妙機《すぐれた素質・能力》を覚知し以て神の斯世に嚴臨《明らかに存在する》し玉ふこと、疑を容るの余地無きに至らしむ。

神の黙示《はつきりといわず暗黙の中に意思・秘義を表示すること》は則ち吾人俯仰《下を向くことと上をあおぐ》觀察する宇宙の靈、力、体の三大を以てす。

- 一、天地の眞象を觀察して眞神の体を思考す可し。
- 一、万有の運化の毫差無きを視て眞神の力を思考すべし。
- 一、活物の心性を覚悟して眞神の靈魂を思考すべし。

以上の活経典あり。眞神の眞神たる故由《由来》を知る。何故人為《人間のしわざ》の書卷を学習するを用むや。唯不變不易《どちらも変わらない事》たる眞鑑《眞実を見極め》実理《實際上から得た道理・理論》ある而已。

天帝は唯一真神にして天の御中主神と称す。宇宙の神光を高皇産靈と曰ひ、神温を神皇産靈と曰ふ。古事記に曰く

『天地初発之時、於高天原成坐神名、天御中主神、次高皇産巢日神、次神皇産巢日神、此三柱神者並独神成坐而、隱身也』

天帝は宇宙万有の大元靈にして幽之幽に坐し、聖眼視る能はず賢口語る能はざる隱身たり。また神光はいはゆる天帝の色にして神温は即ち天帝の温なり。共に造化生成の妙機《すぐれた素質・能力》にして独立不倚《よりかからない》の神徳なり。

神は宇宙万有の外に有り、万有の中に在り、故に之を宇宙の大精神と謂ふ。

大精神の体たるや至大無外、至小無内、若無所在、若無不在なり。聖眼之を視る能はず、賢口之を語る能はず。故に皇典《日本の古典》にいはゆる隱身也は即ち神の義《意味》なり。宜なるかなその靈々妙々《尊く不可思議なこと》の神機《はかり知ることのできないはかりごと》。天帝は無始無終なり、既に無始無終の力と無始無終の体とを以て無始無終の万物を造る。その功また無始無終なり。

天帝は勇、智、愛、親を以て魂となし、動、静、解、凝、引、弛、分、合を以て力となし、剛、柔、流を以て体を為す。

◎全 靈

全靈は荒魂、和魂、奇魂、幸魂、の四魂也。而して荒魂は神勇、和魂は神親、奇魂は神智、幸魂は神愛なり。乃ち所謂靈魂にして、直靈なるもの之を主宰す。俗学不識《しらない》荒和を以て心の体となし奇幸を以て心の用となし、直靈の何物たるを知らず、豈悲しまざる可けむ哉。

全靈 荒魂・・・勇、 和魂・・・親、 幸魂・・・愛、 奇魂・・・智、

◎全 体

剛、柔、流の三物は是れ上帝の全体なり。而して流体を生魂と唱へ葦芽彦遅と称し、剛体を玉留魂と唱へ常立と称し、柔体を足魂と唱へ、豊雲野と称す。

剛体は鉱物の本質なり、柔体は植物の本質なり、流体は動物の本質なり。

スピノーザ曰く、本質とは独立して依倚《依存》する所なきものの謂なり。更に之を言へば本質とは吾人之を理會《事の道理を会得する》するに於て一も他の物と比照するを須ひざるもの是なりと、至言と謂ふべし。

全体の図解

剛・・・常立……………鉱物本質…玉留魂

体 一 柔…豊雲野……植物本質…足魂

流…葦芽彦遅…動物本質…生魂

◎全 力

動、静、解、凝、引、弛、分、合以上八力これを上帝の全力と称す。而して神典にては動力を大戸地と謂ひ、静力を大戸辺と謂ひ、解力を宇比地根と謂ひ、凝力を須比地根と謂ひ、引力を活久比と謂ひ、弛力を角久比と謂ひ、合力を面足と謂ひ、分力を惶根と謂ふ。皆日本各祖の所名なり。

全力の図解

動力…大戸乃地神	・	静力…大戸乃辺神
解力…宇比地根神	・	凝力…須比地根神
引力…活久比神	・	弛力…角久比神
合力…面足神	・	分力…惶根神

靈、力、体合一したるを上帝と曰ふ。真神と謂ふも上帝と曰ふも皆天之御中主大神の別称なり、左《上》図を

見て知る可し。 【13/総説】

三大学則 〈 〉内は愛善歌

一、天地の眞象を觀察して真神の体を思考す可し。

〈天地の眞の象を察らめてまことの神の体を知れ〉

宇宙の本当の姿を觀察し、真神（この世をお創りになた神）の体的働きを思いめぐらしなさい

体とは我々の見ている世界です。宇宙は無限に広い。人類に分かっている範囲に限った場合、半径約465億光年の球状であるようだ。これは現在の理論上で考えられる広さであるが無限に広い空間です。では小さい方はどうか。素粒子が一番小さい物質であるが物質を構成する粒子をフェルミ粒子と云うそうだがそれはクォークとレプトンに分類される。クォークやレプトンの大きさはわかっていないようで、遠く遙かな世界は別にして、身近な世界では太陽や月、大地の恵みを考える時、人類にとって計り知られぬ恩恵を受けています。我々に恩恵をもたらす熱は太陽や地球の地熱によるものです。そして、一切のものの生命は、この巨大なエネルギーによって育てられ守られているのです。神様は宇宙の星々は天津神達の一つの顕現体と示されています。むかしの人は、お日様、お月様と云って拝んで来ました。いま、その形やはたらきの一端を測定できるようになったからといって、単なる物質やエネルギーとしか観ず、太陽を拝むものを笑うにいたっては、むしろ、みずからの浅薄さを暴露するものです。

一、万有の運化の毫差無きを視て真神の力を思考すべし。

〈ものみな運化のくるわぬはまことの神の力なりけり〉

万物の巡り行くさまを觀察し、わずかな差も無きことを知って真神の力を思いめぐらしなさい

宇宙に存在する物は一つとして静止している物は有りません。大は宇宙の星から小は原子に至まで止まることはないのです。しかも一定の秩序に従って運動している時の流れを一秒という単位で決められるのは宇宙の創成から今日に至るまで変わることがないからです。科学が発展できるのも宇宙には厳然とした法則が存在しているからであり、これが曖昧では万物（科学）は生まれません。ここに真神の造化の働きがあるのです。神は力なりと示されています。

宇宙は常に新陳代謝と生成化育を繰り返しています。生物は常に生命の営みを繰り返して進化をとげて来ました。そしてこの化り変りに法則があります。小さな卵からふ化して芋虫が生まれ、それが成長してサナギとなり、やがて蝶へととなります。全ては神の定めた法則によって運化しているのです。

生物は何世代にもわたって生成化育してきた、人類も祖先は類人猿と習った。しかし、神様はあくまでも人は人であり猿から進化したものではないと示されている。現代考古学は漸くそこにたどり着こうとしているようです。また、条件を整えば我々が学んできた生物の発生とは違った方法で生まれるとも示されています。米に発生するコクゾウ虫などは実に不思議な現象です。

また実に小さな種から植物は生長し実を結んで次の世代へと命を繋ぎます。そして、同じ畑に播いてもトマトはトマト、なすはなすへと育ちます。決してトマトがなすになることはありません

一、活物の心性を覚悟して真神の靈魂を思考すべし。

〈活物の心性のはたらきを察らめてまことの神の靈魂を知れ〉

生物全ての心の特質を知って真神の靈的働きを思いめぐらしなさい

動物、植物、鉱物など総ての物は真神の分け魂です。それは全ての物に勇親愛智の四魂と直日が具わっているからです。この一靈四魂があるからこそ、それぞれに応じた心性（特徴や心の働き）が具わってくるのです。

活物はすべからず子孫を残そうと努力します。種の保存は総ての物の義務であり本能です。そして動物には親子の情というものがあります。どんな動物でも子を産めば一人前に自立するまで面倒を見ます。そして、親子の



情は高等動物になるほど親密で情が深く長く続くものです。肉体は滅んでも霊魂は不滅だからです。

## 用語の解説

### ① 弱肉強食

「序」の参考 「優勝劣敗、弱肉強食の時代」（10ページ）を参照

### ② 三段の型

大本独特の考えで、ある事象は3回に分け、順を追って現れるということ。

地球の地理を考えた時、聖師は奄美諸島は日本の雛形であり、日本は世界の雛形であると示されています。

月鏡 346「日本は世界の<sup>えい</sup>胎<sup>な</sup>」

日本は世界の<sup>えい</sup>胎<sup>な</sup>《基本となる形》に当って居つて、世界の地形は日本のそれと相似形をして居るといふ事は度々話した事である。即ち日本は五大島からなり、世界は五大洲からなつてをり、其地形もそつくり其儘である。九州は阿弗利加に、四国は濠洲に、北海道は北米に、台湾は南米に、本洲は<sup>おうあ</sup>欧亜の大陸に夫々相当して居る。紀伊の国はアラビヤに、琵琶湖は<sup>りかい</sup>裏海《カスピ海》に、大阪湾は黒海に、伊勢の海はアラビヤ海に、駿河湾はベンガル湾に、津軽海峡はベーリング海峡に、土佐湾はオーストラリア大湾に、能登半島はスカンヂナビヤの半島に、瀬戸内海は地中海に、関門海峡はデブラルタルの海峡に相当する。これ等はほんの一部分を示したに過ぎないが地名を<sup>げんれい</sup>言霊学で調べて見ると、小さな町や村に至るまで皆同じである。日本国内では鹿児島県の大島《奄美島》が又日本の縮図であつて、総てが相似形をして居る。又それ等の土地に起る種々の出来事も、相応の形をとつて起るのである。単に土地のみでは無い、人の体も亦相応して居るので<sup>ごきょうろつぷ</sup>五臓六腑は五大洲に同じやうな形をして居るのである。

あのネーブルといふ果物がある。エボの所に大きな臍があつてむいて見ると同じやうな形をして居る、<sup>あか</sup>恰も小日本が大日本（世界全体）と相似形をして居ると同様である。不思議な事には、このネーブルは、日本に移植されるといつの間にか臍が無くなつて仕舞ふ。心なきネーブルさへも、日本が世界の親国であるといふ事を知つてみて、日本へ帰ると日本、外国の区別は要らぬとばかりに、臍をなくして世界統一の形を示す。<sup>しんもん</sup>神紋はネーブルを横に切つた切り口の形だと私は神様から聞いて居る。日本といふ国は不思議な尊い国である。

また大本の霊地である若狭湾の沖にある<sup>おしま</sup>冠島、<sup>めしま</sup>杓島（艮の金神御引退の島）と瀬戸内海の神島（坤の金神御引退の島）の二島を地図上で線を結ぶと綾部がその線上に在ります。これを日本に拡大し冠島杓島に相当する北海道の芦別山と神島に相当する鹿児島県の喜界ヶ島を結ぶと、やはり綾部がその線上にあります。物語では冠島杓島（芦別山）は世界の東北に位置する日本。神島（喜界が島）は地中海のサルジニア島（瀬戸内海は地中海に相当）に当たると言われています。そして綾部に相当するのが大古の聖地エルサレムであり、イラク北部と思われる。これも三地点はほぼ一直線上に来ます。また、

大本神諭には大本に有ったことは日本に移り、更に世界へと移り、また逆もあると書かれています。

その一つの例が大本事件です。昭和十年十二月八日に起こった第二次大本事件で、聖師は島根県松江市<sup>しんぐとこ</sup>宍道湖の近くにおられたとき、早朝官憲により検挙され六年八ヶ月獄中におられました。事件から六年後の昭和十六年十二月八日<sup>しんじゅわん</sup>真珠湾の奇襲攻撃によって太平洋戦争が起こります。大本事件は二十年九月八日に大審院で無罪判決を受け終結しました。太平洋戦争は二十六年九月八日にサンフランシスコ講和条約で終結します。さらに聖師夫妻と出口宇知磨氏が六年八ヶ月獄中におられました（10年12月から17年7月まで）が連合軍の日本占領も同じく6年8ヶ月（22年9月から27年4月末）でした。

また、事件が起こると裁判の行方も見定めずに直ちに神苑内の建物は破壊され無残な姿を見せました。ちょうど終戦時の日本の姿はこれと類似しています。

## 第二章 《 国祖御引退の因縁 》 [二]

## 現代語訳

一、

130 大国常立尊の御神力によって、天地はここに分れ、太陽、太陰（月）、大地のそれぞれを治められる分担神が定まったことは、前に述べたとおりである。そうして太陽の靈界は伊邪那岐命がこれを御支配になり、その現界は、天照大御神がこれを治められるのである。次に太陰の靈界は、伊邪那美命がこれを御支配になり、その現界は、月夜見之命がこれを治められる。大地の靈界は前に述べたように大国常立命が之を御支配になり、その大海原（地球）は日之大神の命令によって須佐之男命がこれを治められることが神によって定められた。

それなのに太陽界と、大地球界とは鏡に映したように、同一状態に混乱紛糾の状態を出現した。太陰の世界だけは、現幽両界ともに元のままに、平和に治まっている。一部太陰に限って、なぜ今でも平和に治まっているかと言えば、この理由は月の形を地上から観測しても明らかである様に、光はあってもあまり厳しくなく、水気はあってもひどく寒くはない。実に寒さと暑さの間を保った極めて善美な世界であるからである。これに反して131太陽の世界は、非常に全てのものが激しく光は鮮かであり、宇宙の隅々まで照す神力はあるけれども、それだけまた暗黒な陰影も多い。また大地は、始めから濁った分子が凝り固まってできたものであるから、その結果として当然不浄分子が多い。したがってまた邪神の発生するもの、しかたがない次第である。

そこで稚姫君<sup>わかひめぎみのみこと</sup>命は、天<sup>あめ</sup>稚彦<sup>わかひこ</sup>と共に神の命令をうけたまわって天に上り、天界の神政を統治しようとなさい。また、天上に御昇りになる途中において、地上から付いてきた邪神どもに背かれ、①天地経綸<sup>てんちけいりん</sup>の機織<sup>はた</sup>の仕組を失敗なさり、とうとう地上に降りられて国常立命と共に地底に隠れられ、あらゆる艱難苦勞を忍ばれる止む終えない状況となった。稚姫君<sup>わかひめぎみのみこと</sup>命の御失敗の理由については、後日詳しく述べることにする。

二、

さて、大国常立命は天地間の混乱状態を作りだす邪悪分子を滅ぼして、神界を最初の御目的どおりの幽政（幽界での政治）を行おうとなさいました。これについて国祖は、まづ<sup>ひつじさるの</sup>坤<sup>ひつじさるの</sup>金神を内助（内部からの助）役として種々の神策を御計画になり、また、②大八洲彦命を天使長兼宰相の地位につけて、非常に厳格な規則正しい<sup>まつりごと</sup>政<sup>まつりごと</sup>を行い、天上界の法律を定めて、わずかでも132天則を犯すものは、罰するというに決定なさいました。そのために地上の年数にして数百年の間は非常に立派に神政が行われていましたが、世の中が次第に開けて行くにつれて、神界、幽界、現界ともによこしまな悪い神々が蔓延<sup>はびこ</sup>ってきた。すなはち八百万<sup>やほよろずかみのみ</sup>の神人は、日増に大神の政治に対する不服を訴えるやうになり、山川草木にいたるまで批判し論争をする世になった。

そこでやむおえず宰相の大八洲彦命は、国常立尊の御意志に背くと知りつつも、③和光同塵<sup>わこうどうじん</sup>の神策を行い、批判し、論争する多くの神々を抑えなだめつつ、ともかくも世を治めてゆかれたのである。

それなのにこのとき靈界はいくつにも分裂するような情勢となり、一方には、盤古大神（又の御名を塩長彦）をもち立て、幽政を支配しようとする一派が生まれ、他方には、④大自在天神大国彦を押し立てて神政を支配し、地の高天原を占領しようとする神人の集団が出現し、その他諸々の神々の小集団は、或いは盤古大神派に、或いは大自在天神派に付こうとし、また中には、この両派に付かないで中立の立場をとり、国常立尊の神政に133反対する神々も出てきた。

三、

そこで国常立尊はやむをえず天に向って救援を要請された。天からは天照大御神、日の大神《伊邪那岐尊》、月の大神《伊邪那美尊》、この⑤三体の大神が、地の高天原にお下りに成られ、国常立尊の神政および幽政のお手伝いをなさることになった。国常立尊は畏れ多いこととして謹<sup>つと</sup>み、うるわしい宮殿をお造りし、三体の大神をお迎え申し上げた。それなのに、地上は国常立尊に従う神人は非常に減少して勢力を失い、盤古大神および大自在天神の勢力はとて馬鹿に出来ないほどで、つひに国常立尊に対して、御退位をするようお迫りになった。天の御三体の大神は、地上の暴悪な神々にむかって、あるいは宥<sup>なだ</sup>め、或いはいましめ、天則に従わなければいけ

ないことを真心から道理をお話になられた。しかし、世の中の情勢は悪神に有利となっており、いはゆる…悪盛んにして天に勝つ《邪悪な考えや行いが盛んになり、正義が影を潜めることのたとえ》…という深刻な状態になった。

ここに国常立尊は天神と協議に協議を重ねて、髪を抜きとり、手を切りとり、骨を断ち《切り離す》、筋を千切り《ねじ切る》、手足をバラバラにするような惨酷な処刑をしかたなくお受けになられた。しかし尊は 134 実際は宇宙の創造神なので、一旦は肉体はバラバラになっても、すぐにもとの肉体に戻られ、決して滅びられるということはない。

四、

暴悪な神々は盤古大神や大自在天神を大将として、無理矢理自分の要求を通そうとして、つひに天の御三体の大神様の御殿までお汚し申すということになり、国常立尊に退隱のご命令を下して頂けるようにと要請した。さて天の御三体の大神様は天下を治める君系であり、国常立尊は家来となる臣系となっているが、元来は大国常立尊は元の祖神<sup>おや</sup>でいらっしゃり、御三体の大神様といえども、本来は国常立尊のお生みになった御関係がおありになるので、天の大神様も偽らざる心としては、国常立尊を退隱させるには忍び難いこととお考へになられたけれど、ここにこうした時節が来たことを止む終えぬこととお感じになり、涙を流しつつ勇猛心をふるい起されて、すべての親子、兄弟の情をすて、しばらくの間<sup>や</sup>八百万<sup>ほよろず</sup>の神々の申し出を、御採用に成られることになった。そのとき天の大神様は、国祖に対して後日、再び立たれることを以心伝心的（言葉ではなく心と心で）に言い伝えられて、国常立尊に御退隱をお命じになり、天にお帰りになられた。

その後、盤古大神<sup>ばんこだいじん</sup>を擁立する一派と大自在天神<sup>だいじざいてんじん</sup>を押立てる一派が、烈しく世界を支配する権力を得ようと争い、135 ついに盤古大神の党派が勝ち幽政の全権を握ることになった。一方国常立尊は自分の妻神である<sup>ひつじさる</sup>坤<sup>ひつじさる</sup>金神と、大地の主宰神<sup>きんかつかねの</sup>金勝要<sup>きんかつかねの</sup>神および宰相神<sup>おほやしまひこのみこと</sup>大八洲彦<sup>おほやしまひこのみこと</sup>命その他の有力な神人と共に、わびしく⑥流刑の地に赴きになりました。

五、

地上の神界を支配なさる大神さへ、このように御隠退になるという有様ですから、地上を治められる<sup>すきのをのみこと</sup>須佐之男命<sup>また</sup>も赤、八百万の神々に、仕方なく追放されて、日本国を立去り、世界の隅々へ放浪の旅をつづけられることになった。しかし須佐之男命は、地上世界において<sup>やまたのおろち</sup>八岐大蛇<sup>やまたのおろち</sup>を平げ地上を清め、<sup>あまてらすおほみかみ</sup>天照大御神<sup>あまてらすおほみかみ</sup>にご報告になると同じやうに、神界においても、すべての悪神を討ち滅ぼして地上を天下泰平に治め、御三体の大神様にお目に向け、地上の支配の大神となられるのである。

さて、わたしはこれから国常立尊に従われた多くの神人の中でも、主な<sup>かみがみ</sup>神司<sup>かみがみ</sup>の御経歴や活動を述べ、また盤古大神および大自在天神を擁立する一派の神々の経歴および暴動振りを、神界で目撃したまを述べておこうと思う。

.....

一、

太陽の靈界・・・伊邪那岐命が御支配。

現界・・・天照大御神が治める。

太陰の靈界・・・伊邪那美命が御支配。

現界・・・月夜見之命が治める。

大地の靈界・・・大国常立命が御支配。

大海原（地球）・・・須佐之男命が治める（日之大神の御命令により）

太陽界は光によって宇宙の隅々まで照らす、一方影は暗黒を作る。また、大地球界（大地）は元々が濁った不浄分子が多いので邪神が発生するのは当然である。それで両界は鏡に映したように同一の混乱状態を現わしています。

稚姫君命は本来天を治めるため大国常立命が陰陽の水火<sup>い</sup>を合<sup>ま</sup>わしてお生みになったのだが、天上に御昇りにな

る途中において、地上から付いてきた邪神達に背かれ天地経綸の機織の仕組を失敗なされた。地上に降られて国常立命と共に地底に隠れられあらゆる艱難苦勞を忍ばれた。失敗の理由は2巻に詳細に書いてあり、そこでは稚桜姫命と名を替えて出てきます。

二、

国祖は邪悪分子を滅ぼし神界を当初の目的通りの政治を行おうとされ、妻神である坤<sup>ひつじさる</sup>の金神の助けを得ながら、大八洲彦命（素盞鳴尊の四魂の一柱）を天使長にお着けになり、天上界の法律を適用して、非常に厳格で規則正しい政<sup>まつりごと</sup>が行なわれた。数百年は順調にいった。しかし、顕の世界では世が段々開けて行くにつれ、邪悪分子もそれに連れて増えて行くことは致し方ないことである。年と共に神界、幽界、現界ともによこしまな悪神が蔓延り、終いには総ての物が国祖の神政に批判し論争するようになった。

そこで大八洲彦命は、国常立尊の御意志に背くと知りつつも、世間に迎合する政治によって世を治めて行かれたのである。しかし、この時盤古大神と大自在天神大国彦の二大勢力とそれらとは別の勢力が離合集散し国祖に激しく反対していた。

三、

「そこで国常立尊はやむをえず天に向って救援を要請された。天からは三体の大神様が、地の高天原にお下りに成られ、国常立尊の神政および幽政のお手伝いをなさることになった」のです。それでも、悪神達はずいには国祖の御引退を迫ったのです。そこで、天の御三体の大神様は、地上の暴悪な神々を宥め、或いはいましめて天則に従うよう諭されたのですが、いはゆる…悪盛んにして天に勝つ…という深刻な状態になります。

「ここに国常立尊は大神様と協議に協議を重ねて、髪を抜きとり、手を切りとり、骨を断ち、筋を千切り、手足をバラバラにするような惨酷な処刑をしかたなくお受けになられた。しかし尊は実際は宇宙を創造された神なので、一旦は肉体はバラバラになっても、すぐにもとの肉体に戻られ、決して滅びられるということはない」のです。

四、

暴悪な神々はずいには天の御三体の大神様の御殿まで壊し、国常立尊に退隱のご命令を下して頂けるようにと要請します。

天の御三体の大神様（天照大御神、伊邪那岐大神、伊邪那美大神）は天下を治める君系の位置におられますが、元来は大国常立尊は元（宇宙）の祖神でいらっしゃる地に下られたので、形としては臣系になっています。また、御三体の大神様は、本来は国常立尊のお生みになった御関係がおありになるので、天の大神様も偽らざる心としては、国常立尊を退隱させるには忍び難いこととお考へになられました。今は、こうした時代が来たのだとお感じになり涙を流し、親子、兄弟の情をすて、しばらくの間八百万の神々の申し出を御採用に成られることになったのです。天の大神様は、国祖に対して後日、再び立たれることを以心伝心的に伝えられて、国常立尊に御退隱をお命じになり、天にお帰りになられました。御筆先の「神も時節にはかなわんぞよ」の言葉の通り、悪盛んにして天に勝の状態です。

二大勢力である盤古大神と大自在天神は互いに覇権を争い、ついに盤古大神が勝ち幽政の全権を握ることになった。一方国常立尊は妻神である坤<sup>ひつじさる</sup>金神と、金勝要<sup>きんかつかねの</sup>神および宰相神大八洲彦<sup>おほやし まひこのみこと</sup>命その他の有力な神人と共に、わびしく流刑の地に赴かれます。

五、

地の神界でさえこの様な混乱状態なので、地上現界を治められる須佐之男命もまた、八百万の神々に仕方なく追放されて日本国を立去り、世界の隅々へと放浪の旅（高天原からの追放）をつづけられることになったのです。しかし須佐之男命は、地上世界において八岐大蛇を平げ地上を清め、天照大御神にご報告になると同様に、地の神界においてもすべての悪神を討ち滅ぼして地上を天下泰平に治め、御三体の大神様にお目かけ、地上現界の支配の大神となられるのです。

宇宙は陰陽二元の発達が進み、完全な霊五体五の世界になったときが、ミロクの世界です。従って、それまでは体（悪）が先行して進むこともやむ終えないのです。そして現代は物質文明（体）が頂点に達しました。これからは大本（神）の教によって精神的基盤が整い霊と体がバランス良く働く、霊主体従の世界が来るのです。

**用語の解説**

① 天地経緯の機織の仕組

天地経緯はこの宇宙を治められるご計画です。機の仕組の仕組はこれも計画とか組み立て方です。機は機を織るの機で、織物は縦（経）糸と横（緯）糸の組み合わせにより織られます。大本（神）の教えも厳（経・開祖）と瑞（緯・聖師）の教えによって成り立っています。一つの反物を織る時、一千本以上の縦糸が張られ、織り上がるまで変わることはありません。一方、横糸は様々な色の糸が左右に走り模様を織りなして行きます。開祖の御筆先は厳然として変わることがないのですが、聖師の教は霊界物語でもわかるように千変万化に変化し世のあり方を教えています。

ここで、国祖の当初の目的では稚姫君命に天界の神政を任そうとお考えになっていたようですが、地上において悪神によって邪魔され、天測違反によって根底の国に赴くこととなります。この事は国祖同様、宇宙全体として見たとき、この世がミロクの世界を迎える状況に未だ来ていない事を示しています。

② 大八洲彦命

大八洲彦命は素盞鳴尊の四魂の一柱です。荒魂は大足彦。和魂は大八洲彦命。幸魂は言霊別命。奇魂は神国別命です。第一巻では天使長として神業に奉仕します。この後の第25章以降では大八洲彦命は聖師にあたります。

この四魂の御魂はこの後、国祖を助け大活躍をしますが、御引退の後国祖と共に根底の国に赴きますが、再生し名前を変え出現します。また、後世現界に生まれ預言者（宗教家）として衆生を済度します。

素盞鳴尊の四魂の時代別名称

荒魂	おおだる 大足彦	だるまひこのかみ 足真彦神	だるま 達磨大師
和魂	おおやしま 大八洲彦命	つきてるひこのかみ 月照彦神	釈 迦
幸魂	ことたまわけ 言霊別命	すくなひこのかみ 少彦名神	キリスト
奇魂	かみくにわけ 神国別命	ひろやすひこのかみ 弘子彦神	孔 子

③ 和光同塵

和光同塵の意味は老子から出た言葉で、自己の知徳の光を和らげかくして、世間的に混じっていること。神の権威を和らげ世間に迎合すること。仏教では、仏、菩薩が衆生を救うために、本地の光をかくして、塵のように汚れた俗界に混じって身を現わすことをいいます。

この世をお造りになった神による統治が本来の姿です。神代の昔のように国常立命が絶対的権威を持ち蓮華台上に居られ、天使長が宰相として実際の政務を行うのが正しい形です。しかし世が段々と悪に傾き、国祖のような厳格で堅苦しい政治に反発するようになります。そこで大八洲彦の命は仕方なく、悪いことと知りながら神の道に反することにも同調します。しかし、ミロクの世界では和光同塵は廃され厳格な政治が行われるでしょう。もしこれを嫌うなら神の住まいどころである日本国には住めないこととなります。

④ 大自在天神大国彦

大自在天神大国彦は、天王星より地上に降臨したる豪勇の神人である。いづれもみな善神界の尊き神人であつたが、地上に永住されて永き歳月を経過するにしたがひ、天足彦、胞場姫の天命に背反せる結果、体主霊従の妖気地上に充満し、つひにはその妖気邪霊の悪竜、悪狐、邪鬼のために、いつとなく憑依されたまひて、悪神の行動を自然に採りたまふこととなつた。【2/総説】 六面八臂の邪鬼に憑依された。

【3/総説】では、大自在天神大国彦は盤古大神塩長彦や八王大神(常世彦)などと結託し、世界を物質主義に悪化させ、優勝劣敗、弱肉強食の端を開き、つひには收拾すべからざる悪逆無道の暗黒界と化せしめた。そして、常世の国の八王大神(常世彦)と密議をこらし、常世会議を開き常世彦が神界の主宰者にしようと計画します。また、その後大国彦はウラル教を開き、その子大国別は後に婆羅門教を開きます。

⑤ 配所に退去し給うた（流刑の地に赴きなさいました）

大八洲彦以下素盞鳴尊の四魂の御魂は天測違反を犯し、万寿山に<sup>ちつきよ</sup>蟄居を命ぜられます。【3/43 配所の月】 また金勝要神の四魂である高照姫以下の神もまた、エデンの園に流されます。【4/45 猿猴と渋柿】 そして、国祖が万民の罪を贖って（一神に引き受け）根底の国に赴かれる時はこれら上記の神々も根底の国に行かれます。

## 第二章 《黄金の大橋》 〔二三〕

## 現代語訳

137 地の高天原は、盤古大神塩長彦系と大自在天大国彦系の反抗的活動によって、一旦は滅茶滅茶に元からひっくり返えされようとした。従ってその実状を述べるに先きだち、地の高天原の状況をおおよそ述べておく必要がある。

私の<sup>みたま</sup>靈魂は今まで須弥仙山の上に導かれて、総て前述の状況を目撃していたが、天の一方より爽やかな音楽が聞えて、自分の<sup>うらわ</sup>霊体は得もいわれぬ鮮やかで麗しい瑞雲に包まれた。その瞬間、場面は一変して元の神界旅行の姿に戻っていた。

一方は細く、ある所は広く、<sup>ひょうたん</sup>瓢箪のような道路を進んで行くと、そこには大きな河が流れている。これは神界の大河で①ヨルダン河とも言い、又イスラエルの河ともいう、また五十鈴川ともいうのである。さうしてそこには非常に大きな<sup>そり</sup>反橋が架っている。

この橋は、全部<sup>こがね</sup>黄金造りでちょうど②住吉神社の反橋のやうに、勾配の急な、長い大きな橋であった。神界旅行の旅人は、総てこの橋の<sup>たもと</sup>袂へ来て、その荘厳で美しいのと、138 勾配の急なのに大変に驚いてしまい、例えば昇りかけて橋から滑り落ちて河に落ち込むものもある。また一方には金色にきらきらと輝いているから、それぞれに自分の身魂が映って本性を現すようになっている。それで中には非常に猛悪な悪魔の姿が現れて来て渡れないので、その橋を通らずに、橋の下の深い流れを泳いで<sup>むかふぎし</sup>彼岸に着く悪神も沢山いる。それは千人に一人くらい<sup>こがね</sup>の比であって、神界ではこの橋のことを黄金の大橋と名づけられている。

私はこの大橋を足の裏がくすぐったいような、<sup>まが</sup>眩しいような心持でだんだんと向こう岸へ渡った。少し油断をすると上りには滑り、<sup>くだ</sup>下りになれば仰向けにひっくり返るようなことが幾度もある。要するにこの黄金の大橋は、十二の太鼓橋が繋がっているやうなもので、<sup>らんかん</sup>欄干が無いから、橋を渡るには全ての荷物を捨てて素足となり足の裏を平たく、くっつけて歩かなければならない。

さうしてこの橋を渡るとすぐに、私はエルサレムの聖地に着いた。この聖地には<sup>こがね</sup>黄金や、<sup>めのおう</sup>瑪瑙のような<sup>しつぽう</sup>七宝の美しい玉によって雄大で、とても形容のできない大神の宮殿が造られている。

139 さうしてこの宮はエルサレムの宮ともいえば、また<sup>うづ</sup>珍の宮とも<sup>とら</sup>称えられている。うづのウというのは(ウ)エルの③返し、サ(レ)ムの返しがスであるから、珍しい宮といふ<sup>ことば</sup>言霊の意義である。さうしてこの宮の建っている所は、④<sup>れんげだい</sup>蓮華台上である。この台上に<sup>のぼ</sup>上って見ると、四方はちょうど屏風を立てたように青山を廻らし、その<sup>さか</sup>麓にはヨルダン河が、布をさらしたように長く流れている。また一方には金色の波を漂わせた湖水が、麓を取囲んでいる。その湖水の中には、大小無数の島があつて、その島ごとに宮が建てられ、どれもこれも皆<sup>い</sup>檜造りで、少しの飾りもないが非常に清らかな宮ばかりである。それからそこにも黄金の橋が架けられており、その橋の向うには大きく高い御殿があつて、これも全部<sup>こがね</sup>黄金で造られている。これを竜宮城という。

空には金色の<sup>からす</sup>鳥が何百羽ともわからぬほど飛び交い、またある時は、<sup>いかるが</sup>斑鳩が沢山に群をなして飛んでいる。さうして湖には沢山の<sup>あし</sup>鴛鴦が、悠々と泳いでおり、また大小無数の甲羅に緑色の苔が糸状に生えた亀が遊んでいる。

140 この小さな島にはすべて色<sup>つや</sup>艶のよい松ばかり繁茂し、松の枝には所々に鶴が巢を作って長い年月を祝い、一見しても天国浄土そのもので、どこにも邪悪な物の影さえもなく、そこに行き来する神人は、皆<sup>よろこび</sup>喜悅に満ちた顔をしている。これが、国常立尊の治られる神都の大体の様子である。さうしてこの竜宮を占領して、自ら竜王となり、地の高天原を治める権力を握ろうとする一つの神の団体が、盤古大神系である。この団体が、蓮華台上を占領しようとする大自在天《大国彦》一派の悪神と協力し、しだいに聖地に入り込み、内と外から互いに協力してエルサレムの聖地を占領しようと企んでいた。

蓮華台上に昇り、珍の宮まで到達できる身魂は、既に神界より大使命を<sup>おび</sup>帯た神人であり、また竜宮に到達できる身魂は、中位の神人であつて、今までの総ての罪悪を信仰の努力によってすっかり取り除き、<sup>おわび</sup>御詫によって許

され、始めて人間の資格を備えることの出来たものの行く処である。この蓮華台上の珍の宮は、天国のままを写されたものであって、天人天女のように清らかな身魂<sup>かみがみ</sup>の神人らが、天地の神業<sup>しんぎょう</sup>に奉仕する聖地である。また竜宮は主として竜神の集まるところで、竜神が罪を許されて美しい男女の姿に生まれ変わる神界の修業場である。

141 さうしてこの竜宮の第一の宝は⑤麻邇<sup>まに</sup>の珠<sup>たま</sup>である。麻邇の珠は一名満干<sup>みちひ</sup>の珠といい、風や雨、雷や稲妻を使う竜神を大声を掛けて、自由に使う神器である。だから総ての竜神はこの竜宮を占領し、その珠を得ようとして非常な争闘をはじめている。けれどもこの珠はエルサレムの珍の宮に納まっている⑥真澄<sup>ますみ</sup>の珠に比べてみれば、天と地、雲と泥ほどの差がある。また竜神は実に美しい男女の姿をはっきりと現わることが出来るといっても、天の大神に仕えておられる天人に比べれば、神としての資格と人に自然にそなわっている品格と言う点で、著しく劣っている。またどれほど竜宮が立派であっても、竜神は、鳥や獣の範ちゅうから出ることができないから、人の世界よりも一段下に位している。したがって人間界は竜神界よりも一段上で尊く、優れて美しい身魂であるから神に代って、竜神以上の神としての資格を神界から与えられているものである。

しかし、人間界がだんだんと墮落し悪くなってきたので、当然上位にあるはずの人間が、一段下の竜神<sup>ひざまず</sup>を跪いて祈るようになり、ここに身魂の逆転が生まれることとなった。

ここで聖師は再び神界旅行に戻られ地の高天原（聖地エルサレム）へ行く橋の前に来られたようだ。流れる川はヨルダン川でそこには非常に大きな反橋<sup>そり</sup>が架り黄金の大橋という。黄金で出来た太鼓橋なので、たいそう滑りやすく、油断をすると滑り落ち、またキラキラ光り自分の本性が現れるようだ。猛悪な悪魔の姿が現れては恥ずかしくて渡れない。要するに悪と善を立て分ける橋である。

エルサレムの宮は言霊学上よりはエルの言霊返して「ウ」となる。サ(レ)ムの返しが「ス」であるから、ウズ(珍)となり、珍<sup>うず</sup>の宮ともいう。でこの宮は蓮華<sup>れんげだい</sup>台上に建っているという。ここに書かれているエルサレムの風景はちょうど聖地綾部とよく似ている。現在の綾部には湖こそないが、蓮華台上は本宮山に当たり、エデンの川は和知川に相当する。綾部は周囲を山に囲まれた盆地である。蓮華台とは蓮の花をイメージし実に清浄な土地である。昔弘法大師がこの蓮華台上を捜して全国を行脚されたがついに見つからず高野山に居を構えたと聞いた。神は国祖御再出現まで隠されておかれたのである。

珍の宮には国常立命が居られ、竜宮城は天使長が政治を行う場所でエルサレムの内にある。悪神は竜宮城を占拠し、強いては珍の宮までも占拠しようと盤古大神系と大自在天《大国彦》一派の悪神は協力し、しだいに聖地に入り込み、内と外から互いに協力してエルサレムの聖地を占領しようと企らんでいた。

この蓮華台上の珍の宮は、天国のままを写されたもので、天人天女のように清らかな身魂<sup>かみがみ</sup>の神人らが、天地の神業<sup>しんぎょう</sup>に奉仕する聖地である。また竜宮は主として竜神の集まるところで、竜神が罪を許されて美しい男女の姿に生まれ変わる神界の修業場である。

蓮華台上に上られる神人は神界より大使命<sup>おび</sup>を帯た神人である。また竜宮に到達できる身魂は中位の神人であって、今までの総ての罪悪を信仰の努力によってすっかり取り除き、御託<sup>あわび</sup>によって許され、始めて人間の資格を備へることの出来たものの行く処である、と示されている。

竜宮の第一の宝は麻邇<sup>まに</sup>の珠<sup>たま</sup>で一名満干<sup>みちひ</sup>の珠といい、風や雨、雷や稲妻を自由に使う事の出来る神器である。一方真澄<sup>ますみ</sup>の珠と比べると、天と地、雲と泥ほどの差がある。それは神に仕える人と竜神とは、神としての資格や品格に格段の差があるのである。竜宮がどんなに立派であっても、竜神は、鳥や獣の範ちゅうから出ることができないから、人の世界よりも一段下に位している。それなのに人間界がだんだんと墮落し悪くなってきたので、当然上位にあるはずの人間が、一段下の竜神<sup>ひざまず</sup>を跪いて祈るようになり、ここに身魂の逆転が生まれることとなったようだ。

人は真神や天津神以外みだりに祈願るものではない。もし神社の前を通ったり、観光で行ったときは挨拶として礼拝するのがよい。神社であれ、お寺であれ人の家に行って、挨拶もなくずかずかと入り込むのは失礼である。



用語の解説

① ヨルダン河

ヨルダン川は本文にあるように聖地エルサレムを流れる大河です。

第35巻第1章に以下のように書かれています

「昔の聖地エルサレムの附近、現代の地中海が、大洪水以前にはモウ少しく東方に展開してゐた。さうしてシオン山といふ霊山を以て地中海を両分し、東を竜宮海といつたのである。今日の地理学上の地名より見れば、余程位置が變つてゐる。神代に於けるエルサレムは小亜細亞の土耳其の東方にあり、アーメニヤと南北相對してゐた。又ヨルダン河はメソポタミヤの西南を流れ、今日の地理学上からはユウフラテス河と云ふのがそれであつた。新約聖書に表はれたるヨルダン河とは別物である。さうしてヨルダン河の注ぐ死海も亦別物たることは云ふ迄もない。今日の地理学上の波斯灣が古代の死海であつた。併し乍ら世界の大洪水、大震災に依つて、海が山となり、山が海となり、或は湖水の一部が決潰して入江となつた所も沢山あるから、神代の物語は今日の地図より見れば、多少變つた点があるのは止むを得ぬのである」

② 住吉神社

大阪市住吉区住吉にある元官幣大社。住吉神(スミエカミ)の三神と神功皇后とを祀る。二十二社の一。摂津国一の宮。今は住吉大社と称。同名の神社は、下関市一の宮住吉(長門国一の宮)や福岡市博多区住吉(筑前国一の宮)など各地にある。【広辞苑より】

③ 返し

言霊には返しと云うのがあります。詳細については知識を持ちませんが、霊返しについて少し書きます。

《える・さ(れ)む》の霊返し

わらやまはなた **さ**かあ  
 りいみひにち **し**きい  
 う **る**ゆ **む**ふぬ **す**く **え**  
 りええめへねてせけ **え**  
 をろよもほのとそこお

《う・す》

本文のエル

サレムは「える」と「さ(れ)む」に分かれます。え・るの交点に「う」がきます。同様に、さ・むの交点に「す」がきます。従って、「う・ず」となります。

《えじ・ふと》の霊返し

わらやまはなた **さ**かあ  
 りいみひにち **し**き **い**  
 うるゆむ **ふ**ぬつすく **い**  
 りええめ **い**ねてせけ **え**  
 をろよも **い**の **ほ**とそこお

《い・ほ》

次にエジプトの霊返しを考えてみましょう。エジプトは「えし」と「ふと」に分かれます。え・しの交点は「い」です。ふ・との交点は「ほ」となり、霊返しは「いほ」となります。

参考：「大本の出現とそのあかし 五、五十音の神秘」（昭和七年三月、天声社より出版）

世界の終末と、大本がその救済の根本存在であり、救世主が実にそこに顕現しませることに就いては幾千年来、何事にも、何ものにも示されているのであって、その若干は以上に掲げた所であるが、五十音や、いろはの中にもまた玄妙なる天啓が織り込んである。五十音の秘義《奥深く秘められた教え》については出口聖師の筆による神歌いろは歌（大正六年十一月三日記）の中に解明してある。

ナ	タ	サ	カ	ア
ニ	チ	シ	キ	イ
ヌ	ツ	フ	キ	ウ
ネ	テ	セ	ケ	エ
ノ	ト	ソ	コ	オ

のあとなおの方舟

のあの言霊など返り、なおの言霊のと返る。のあとなおとの方舟の、真中に住みきるすの御霊、すめら御国のすがた也。のの言霊を調べれば、地に泥水充ち溢れ、渦巻廻る御霊なり。あの言霊を調べれば、天津御空に登り行き、成り合いまさぬ御霊なり。のあの御霊は泥水の、世界を浸し山を越え、賤しき身魂の雲の邊に、上りて天を汚すなり。さわ去り乍ら世の人よ、昔の事と思うなよ。のあの御霊の災いは、今日の当たり現れにけり。なの

言靈を調べれば、火水の結びの御魂にて、天津御空に二柱、鎮まり坐す姿なり。

おの言靈を調べれば、汚れし地を清めつゝ、六合を治むる御靈なり。地より生れし埴安の神の御靈もお声なり。五大洲の中心に、皇御国の天皇の、四方の国々統べ給う。この言靈を省みて、皇御国の天職を、覚りてなのおの方舟の、さとしの船に乗り移り、瑞の御魂に神習い、泥に漂う世の人を、なお靈に見なおし詔りなおす、神の大道に導きて、世人救いてヒマヤラの、山より高く名を上げて、二度目の神代の種と成り、万代までも世の人の、救いの神と鳴り渡る、言靈の道尊けれ。

意義深遠にして容易に解し難きものがあるが従来これが一部に就き私解を試みた人がある。今それを参酌《比べて参考にすること》して二三ヶ所私解をさして頂くことにする。

のあの言靈など返り、なおの言靈のと返る。言靈学上靈返し之法則によればノとアの言靈はノ行とア行の交叉せるナに返るのである。同様にナとオの言靈はノと返るのである。

のあとなおとの方舟の真中に住みきるすの御靈、すめら御国のすがた也。

のあとなおとのこの救いの船は縦横共に五字づゝよりなる正方形となり居りて全くの方舟である。昔はノアの洪水のとき、ノアの一族は神示のまにまにノアの方舟に入りて救われたが、今度はナオの方舟に入りて人類は救われ、かくて神政は成就すべきである。而してすは言靈学上「」を以て表すのであるが、七十五声が一声におさまる時すの声となるのであってすは一切を統括する言靈である。すべる、すめらぎ等の言靈より発したる言葉である。『真中に住みきるすの御靈』とあって『すの御靈』がナオの方舟の正中に入りて位し給う。つまりナオの方舟によりて、世界統一、神国建設の天業の成就する時、その神の御国の中心の高御座に天津日嗣の御位がすみきり、輝き給うるのであって、是が皇御国の本来の御姿である。

大本神歌（大正六年十二月一日記）に曰く

四方の国々天の下、治めて茲に千早振る、神代乍らの祭政一致、開き始めて日の本の、現津御神に奉る、常磐の御代ぞ楽しけれ。と、次に

ナ	タ	サ	カ	ア	天	（アジア）
ニ	チ	シ	キ	イ	火	（アメリカ）
ヌ	ツ	⊗	キ	ウ	結	（アフリカ）
ネ	テ	セ	ケ	エ	水	（ヨーロッパ）
ノ	ト	ソ	コ	オ	地	（オーストラリア）
（	（	（	（	（		
オ	ヨ	ア	ア	ア		
ス	ー	フ	メ	ジ		
ト	ロ	リ	リ	ア		
ラ	ッ	カ	カ			
リ	パ	）	）			
ア						

の言靈を調べれば、火水の結びの御魂にて、天津御空に二柱、鎮まり坐す姿なり。

ナは字は十して、火の用は縦（一）、水の用は横（一）である。即ち火水の結びであって、即ち神である。而して天之御中主大神が、日の大神（厳靈）、月の大神（瑞靈）の二柱の神々と顕現ましましている『天津御空に二柱鎮まり坐す姿なり』である。

五大洲の中心に、皇御国の天皇の、四方の国々統べ給う。左の表に現る如く、この方舟の正中にまします『すの御靈』は五大洲の正中にましますのである。

④ 蓮華台上 【17章参照】

⑤ 麻瀧の珠

一般に麻瀧とは珠玉の総称。悪を去り、濁水を澄ませる徳があるといわれる。如意はその漢訳。ここでは竜宮の第一の宝で一名満干の珠といひ、風雨電雷を叱咤し、自由に駆使する神器。潮満の玉の働きは流水で、この玉を使う時は水が大量にほとぼしり出、洪水となす。潮干の玉は逆に、洪水を引かせる。また猛火を放つ。

国常(治)立尊が冠島と杳島をお生みになり、潮満の玉、潮干の玉を冠島へ隠し海原彦(綿津見神)に守護させた。また以下の関係がある

潮満の玉……厳の御魂 豊玉姫 紅色

潮干の玉……瑞の御魂 玉依姫 純白色

⑥ 真澄の珠

真澄の玉……大風　潮満の玉……竜水　潮干の玉……猛火  
真澄の玉は杳島へ隠させ国の御柱神の守護とした。

#### 参 考

玉は剣同様、言霊である。

この後、この一卷では潮満の玉、潮干の玉、真澄の玉の三個の玉の話が出てきます。【35章 一輪の秘密】にはこの三個の玉は「いづれも世界の終末に際し、世界改造のため大神の御使用になる珍<sup>うづみ</sup>の御宝である。しかして之を使用さるる御神業がすなはち一輪の秘密である。」とあり、世の終末《大本の出現する現代》に大神が使用なさる御宝です。そして、最終的にはその玉の精霊はシオン山に隠された【36章 一輪の仕組】とあります。シオン山＝橄欖山＝本宮山であり、大八洲彦命は上記三個の玉をえて、三ツの御魂の大神《瑞の御魂》とられたとあり 【32章 三個の宝珠】、即ち聖師を隠し置かれたとの意味ではないでしょうか。

